

決め手はコストと構築不要の利便性 バックアップの延長感覚で クラウドによるBCP対策を実現

既存のバックアップ運用にクラウド転送を足し算



ユーザープロフィール

業種:学校法人
会社名:国際基督教大学

ICU 国際基督教大学
INTERNATIONAL CHRISTIAN UNIVERSITY
Expanding Potential

課題

学校法人 国際基督教大学ではシステム基盤の仮想化を推進。現在は全サーバの9割が仮想化され、冗長化構成となっている。そのバックアップを担っているのがArcserve UDP Applianceで、学生や教員がいつでもシステムを利用できる環境を提供している。ただ、BCP対策としての遠隔地バックアップが実現していないことが懸念されていた。

経緯

遠隔地バックアップを実現するための適切な拠点がなく、クラウドの活用が望ましいと考えていた。しかし、システムの考え方がオンプレミスとは少し異なるため、いきなりバックアップサービスだけ利用してうまく利用できないのではと不安を抱いていた。さらに、クラウドバックアップはストレージ費用のみならずデータ転送費用といった従量課金も発生するため、コスト面で心配だった。

導入

そうしたおり、ArcserveからクラウドバックアップサービスであるArcserve UDP Cloud Hybridの提供が開始された。UDPユーザーであれば既存運用の継ぎのような感覚でクラウドへ遠隔地バックアップが実現できる点を高く評価して採用した。また、容量課金のみで年額固定のわかりやすいライセンス体系や、データ通信料が不要でランニングコストがかからないこと、重複排除なども可能なコストパフォーマンスの高さも決め手となつた。

効果

2020年4月より開始した遠隔地バックアップにより、同学は宿願だったBCP対策を実現させ、学内外に胸を張れる盤石のシステム保護体制を獲得した。また、これによるITセンターの運用工数増大はまったく発生していない。今後、システム基盤そのもののクラウド移行を検討する中でも、遠隔地バックアップは引き続きArcserve UDP Cloud Hybridでと望まれている。





宿願だったシステム保護の完成形としての遠隔地バックアップ

学校法人 国際基督教大学(以下、ICU)は、東京都三鷹市にキャンパスを置く私立大学だ。基督教精神に基づいて1953年に献学され、略称であるICUには、国際性への使命(I)、キリスト教への使命(C)、学問への使命(U)という3つの使命という意味がこめられている。日本がまだ敗戦からの復興途上にある中、世界的規模で展開された募金活動によって同学の礎は築かれた。以来、同学は日本初のリベラル・アーツ・カレッジとして自由にして敬虔なる学風を樹立し、国際的社会人としての教養をもって、神と人とに奉仕する有為の人材を養成し、恒久平和の確立に資することを教育の目的としている。リベラル・アーツ・カレッジらしく、学生数が他の私立大学と比べて1学年600人程度と少なく、教員1人に対して学部学生は18人となっており、学生一人ひとりと向き合う少人数教育も大きな特徴だ。

ICUでは、東日本大震災をきっかけとして学内に点在していた物理サーバの仮想化を決断。ITセンターに非常用電源など災害対策を施したサーバルームを用意し、VMware vSphereによる仮想化基盤を構築した。その仮想環境は冗長化され、バックアップにはArcserve Unified Data Protection(以下、UDP) Applianceが採用されている。現在は仮想化を果たした9割(45台)のサーバのシステム保護の役割を担っている。ここでは仮想マシン単位のイメージバックアップがエージェントレスかつ無停止、しかも重複排除したデータを継続増分バックアップで取得している。

ただ、それでも気にかかる点はあった。大規模な自然災害への備えである。「災害は起こりうると思っていました。実際に東日本大震災も経験しており、サーバ仮想化を進めたのもそれが契機となっています。仮想マシン上のデータは、学生の成績証明などを始めとして大学として蓄積が重要な、失うことのできないものが多いため、早い段階で遠隔地バックアップまで実現させたいと考えていました」とITセンター 太田 康寛氏は語る。

“環境としてはクラウドが望ましいが、慣れないバックアップ運用手順には不安”

遠隔地バックアップを実現するにあたり、バックアップ拠点を広域災害が及ぼないような遠く離れた場所に自ら確保し、運用管理し続けるのは困難だったため、同学ITセンターは当初からクラウドの活用が望ましいと考えていた。また、大学のITセンターは大抵どこも少数精鋭主義で運営されており、それはICUも例外ではなかった。

太田氏は、市場で提供されているクラウドバックアップサービスを調査してみたが、少し尻込みする気持ちが生まれてしまったという。

「クラウドはシステムの考え方がオンプレミスとは少し異なります。そのため、未経験の状態でいきなりバックアップサービスだけ利用しようとしても、いざリストアというときに焦って必要以上の時間がかかったり、操作を誤ったりしてしまうのではないかという不安を感じました。



学校法人 国際基督教大学
ITセンター長代理／IRオフィス

小松 優子 氏



学校法人 国際基督教大学
ITセンター

太田 康寛 氏



さらに、クラウドバックアップはデータを保持するためのストレージ費用のみならず、リストアの際に別途ネットワーク転送費用がかかることも懸念材料でした」

運用を変えず構築の必要もなく遠隔地バックアップを実現できる

Arcserve UDP Cloud Hybridを採用

そうした中、ArcserveがクラウドバックアップサービスであるArcserve UDP Cloud Hybridの提供を開始した。

これは、統合バックアップ・リカバリソリューション Arcserve UDPやArcserve UDP Applianceを導入済みの組織向けソリューションだ。すでに取得しているオンプレミスのバックアップデータをクラウドストレージに複製するもので、構築・運用の手間をかけることなく、簡単に遠隔地バックアップを行える。まさに、利便性の高いオンプレミスのバックアップと、災害に備えた遠隔地バックアップのハイブリッドを実現できるのだ。データの複製先は東日本と西日本という2つのリージョンから選択でき、ストレージサイズによる年間サブスクリプション費用のみで利用可能だ。

同学ITセンターは、このサービスが提供開始されてまもなくArcserve UDP Cloud Hybridの採用を決定した。太田氏は次のように語る。

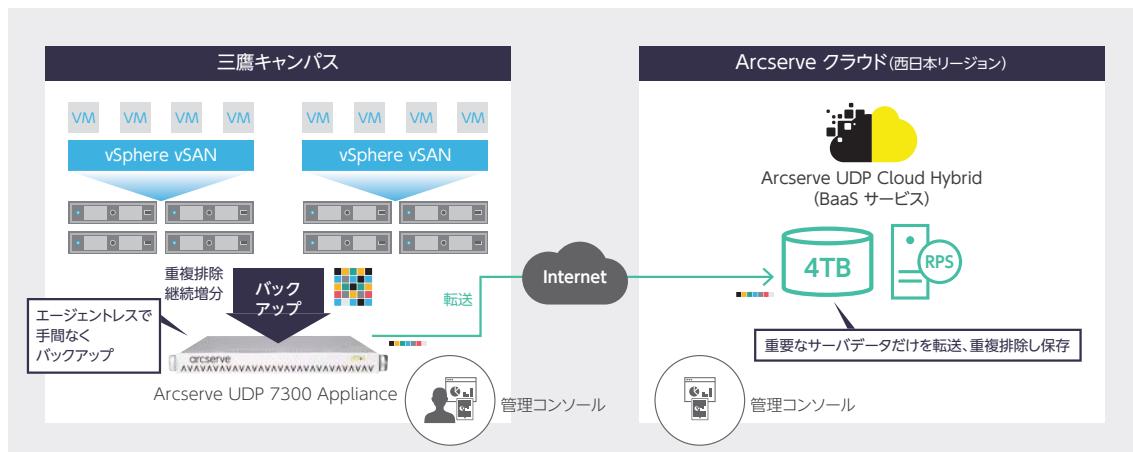
「Arcserve UDP Applianceを導入したときからこのサービス構想については聞いており、期待していました。決めたのは、Arcserve UDPユーザーであればこれまでの運用の続きのような感覚でクラウドへ遠隔地バックアップが実現できるからです。使い慣れた管理コンソール画面でデータ転送先としてArcserve UDP Cloud Hybridを追加設定すれば、あとは自動的に重複排除しデータを転送してくれるので、遠隔地バックアップやリストアのためだけにまったく別のスキルを身につける必要はありません。

また、スマートスタートが可能だったことも背中を押してくれました。システムインテグレータやArcserveが、“オンプレミスに一次バックアップが存在し、後のスケールアウトも簡単だから、最初からすべてをクラウドに上げなくてもいい”とアドバイスしてくれ、優先度の高い重要なデータを複製して4TBのストレージサイズに収める構成にできました」

容量課金のみの明瞭なライセンス体系やコストパフォーマンスの高さも決め手の一つだったと、ITセンター長代理／IRオフィス 小松 優子氏は語る。

「ICUは少人数教育を重視している小規模な大学であるため、コストは度外視できません。そうした中、年間固定の容量課金のみで遠隔地バックアップを実現できるArcserve UDP Cloud Hybridは本学に合ったサービスでした」

Arcserve UDP Cloud Hybridで簡単にBCP対策を実現





運用工数を上げることなく、BCP対策としての遠隔地バックアップを実現

Arcserve UDP Cloud Hybridの西日本リージョンを利用した遠隔地バックアップは、2020年4月よりスタートした。現在は、仮想化基盤上にあるデータ容量の6割に相当する重要データがBCP対策として保護されている状況だ。運用は自動化されており、太田氏が行う作業といえば、ときおり管理コンソールをのぞいてデータの取得を確認することぐらいで、運用の手間はまったく増えていないという。小松氏は導入の効果を次のように語る。

「ITセンターとして遠隔地バックアップが実現できたことを喜んでいます。ICUは学内だけでなく、活発な同窓会組織など大学運営に強い関心を寄せる関係者が多く、システムに関しても『大丈夫?』と聞かれます。これまで『バックアップしているから大丈夫です』と言いながらも、どこか歯切れの悪いところがありました。しかし、今は『BCP対策としての遠隔地バックアップまで実現できたので大丈夫です』と、誰に対しても胸を張って答えられます。この達成感は大きいです」

2020年1月に端を発する新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、ICUにも大きな影響を及ぼした。4月から始まった1学期の授業はすべてオンラインによる遠隔授業に切り換えたが、ここで注目を集めたのが学習支援システムのMoodleだ。教員と学生の間での課題のやりとりなどで劇的に利用が拡大したことから、急遽環境を拡張。それに際してArcserve UDP Applianceを利用したシステム移行を実行したという。事前に旧環境を丸ごとバックアップしておき、作業直前に増分バックアップを取得してから一気に新環境へ移行するためにArcserve UDPの標準機能である仮想スタンバイを利用。Arcserve UDP Applianceはそのディスク容量内であれば無制限にバックアップ対象を追加できるので、移行期間中の新・旧環境でUDPのライセンスを気にせずバックアップ運用を継続できる。ITセンターではスムーズなシステム移行を実現する手段としてArcserve UDP Applianceの活用がすっかり定着している。

今後、ICUではサーバルームのシステム基盤そのものをクラウドへ移行することも検討している。その際も、BCP対策に関してはArcserve UDP + Arcserve UDP Cloud Hybridで継続したいというのが同学の意向だ。

「一つのクラウドにシステム基盤とバックアップ環境を集約するのではなく、よりリスクを分散させるという考え方から、バックアップに関してはバックアップ専業ベンダーであるArcserveが管理するクラウドに任せた方がいいと思っています。大手パブリッククラウドサービスに依存しない独自のクラウドであることも評価しています。全面クラウド移行の際は、その前提で計画を具体化させていきたいですね」

太田氏はこのように語る。ICUはArcserve UDP Applianceと災害対策サービス Arcserve UDP Cloud Hybridによって、運用工数を上げることなく盤石のシステム保護体制を手に入れたのだった。



(左から)

学校法人 国際基督教大学
ITセンター長代理／IRオフィス 小松 優子氏
ITセンター 太田 康寛氏

arcserve[®]

すべての製品名、サービス名、会社名およびロゴは、各社の商標、または登録商標です。
製品の仕様・性能は予告なく変更する場合がありますので、ご了承ください。
Copyright ©2020 Arcserve (USA), LLC. All right reserved.

Arcserve Japan

お問い合わせ

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング
Arcserve ジャパン ダイレクト 0120-410-116 (平日 9:00~17:30)
JapanDirect@arcserve.com

WEBサイト: www.arcserve.com/jp
※記載事項は変更になる場合がございます。2020年8月現在